

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：32428

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03074

研究課題名(和文) 看護学生の道徳的感受性の全国調査と育成のための教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Nationwide survey of moral sensitivity and development of nursing educational program to foster the moral sensitivity of students

研究代表者

太田 勝正(Ota, Katsumasa)

東都大学・沼津ヒューマンケア学部・教授

研究者番号：60194156

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,400,000円

研究成果の概要(和文)：信頼性と妥当性が確保された唯一の尺度である道徳的感受性尺度学生版第2版(MSQ-ST2)を用いて全国調査、および1つの大学での事例であるが看護倫理の授業を通じた介入調査と経時的変化を確認する調査などを行った。その結果、看護学生の道徳的感受性が学年および学修とともに単純に高くなっていくものではないこと、道徳的感受性には臨地実習の経験が大きな影響を与えること、看護倫理の授業においては、倫理的な問題事例の提示と学生同士による話し合いが効果的であること、そして、MSQ-ST2は入学直後の使用には注意が必要だが、授業が少し進んだ入学3ヶ月目頃からは十分利用可能であることなどが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護学生の道徳的感受性については、看護倫理の授業などで一概に高くないことが報告されていたが、その詳細と理由については明確ではなかった。本研究は、看護倫理に関する知識が増えることで逆に道徳的感受性が抑制される可能性とその理由、臨地実習による影響や看護倫理問題の事例を用いた授業の有効性の一端を明らかにした。あわせて、MSQ-ST2の尺度としての再現性を確認することができ、今後の看護基礎教育において、看護学生の道徳的感受性の育成を図るための教育内容や教育法の工夫と改善について、MSQ-ST2で測定した道徳的感受性を確認しながら行うことができるという、新たな教育法を提示することができた。

研究成果の概要(英文)：Using the moral sensitivity questionnaire for nursing students Version 2 (MSQ-ST2), the only scale that has been shown to be reliable and valid, a national survey to explore the moral sensitivity of nursing students, an intervention study to explore the influence of a case study using a video scenario, and a continuing longitudinal study to confirm changes over time at a single university were conducted. According to the results, (1) the moral sensitivity of nursing students does not simply increase with grade level and academic training, (2) clinical practice experiences significantly impact moral sensitivity, (3) the case study of ethical issues and discussion among students are effective in nursing ethics classes, and (4) the MSQ-ST2 is valid for the early stage in a nursing program. In addition, the MSQ-ST2 should be used with a little caution immediately after enrollment but can be fully implemented from the third month of enrollment, when classes have progressed a little.

研究分野：看護倫理

キーワード：道徳的感受性 看護学生 看護教育 倫理的問題

### 1. 研究開始当初の背景

患者の尊厳と権利の遵守は、看護師にとってもっとも大切な使命の一つである。それを実践するためには高い倫理観が求められ、倫理観の育成は看護師養成の段階から取り組む必要がある。この倫理観には、看護倫理・生命倫理に関する知識に支えられる側面と、人としてのあり方にかかわる道徳的側面の2つがあり、前者は倫理原則などの学修によりその育成は可能だとされ、学修成果についても試験などである程度客観的に評価することができると考えられている。一方、後者の道徳的側面については、効果的な教育法を各教員が手探りで工夫するとともにその学修成果についても評価が難しい。道徳的感受性の育成を定量的に評価する手段がない中で、さまざまな教育法の効果を確認することは難しく、道徳的感受性の定量的評価法の確立と効果の確立された教育法の開発が求められている。

### 2. 研究の目的

本研究は、先行研究で開発した道徳的感受性尺度看護学生版第2版(MSQ-ST2)を用いた全国調査により、看護学生の道徳的感受性の現状について定量的に示すとともに、学年ならびに臨地実習の履修状況の違いによる倫理的問題の認識と道徳的感受性の程度の違いなど道徳的感受性に影響する要因を明らかにすること、ならびに、教育効果が期待される教育法の一つとして看護倫理の授業において倫理的問題事例を用いたグループワークを活用することの効果を確認することにより、道徳的感受性の育成のための効果的な教育法について提案することを目的とする。併せて、現在、信頼性と妥当性が確認された唯一の看護学生向けの道徳的感受性測定尺度であるMSQ-ST2の再現性を確認し、今後の活用のための課題を確認すること、さらに、道徳的感受性との関連が指摘される道徳的苦悩軽減のための組織的支援の実態を明らかとし、道徳的感受性を育んだ看護人材が直面する課題への組織的支援のあり方を検討し、今後の看護倫理教育への示唆を得ることを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では、看護学生の道徳的感受性について、学年ならびに修了した授業内容と実習内容、実習上で経験した道徳的な問題の有無などによる違いについてMSQ-ST2を用いた全国調査、看護倫理の授業における倫理的事例を用いたグループワークの影響についてのインタビュー調査、実際の看護倫理の授業への倫理的事例の活用例についての教育効果の測定、MSQ-ST2の再現性の確認のための入学直後からの継続的調査、スタッフ看護師が経験する道徳的苦悩への組織的支援の実態についての全国調査を行うとともに、今後の看護人材獲得への示唆を得るために、看護職への志望が明確になる前の中学生時代の「ケア」に対するイメージについてのインタビュー調査を実施した。

### 4. 研究成果

#### 4-1. 看護学生が経験する道徳・倫理的問題と道徳的感受性との関連について

無作為サンプリングした全国の80の看護系大学に調査を依頼し、協力が得られた16大学の3,043名の学生(1~4年生)を対象に質問紙調査を行った(2018年度)。調査内容は、(1)先行文献から抽出された28項目の看護倫理上の問題事例と4項目の倫理的問題ではない事例の合計32項目、(2)学年、経験した臨地実習の種類などの属性、および、(3)Takizawa et.al(2021)が開発したMSQ-ST2(日本語版)の3つで構成した。

詳細は、研究成果論文1に示すとおりであるが、ここでは論文中に十分に示すことができなかった道徳的感受性についての結果の一部を示す。

道徳的感受性の学年による差については、道徳的感受性を構成する3つの構成概念の内の「道徳的強さ」について1年生より3年生の平均値が有意に低く( $p < .05$ )、3年生より4年生の平均値が有意に高く( $p < .01$ )になっていた。臨地実習については、全体として臨地実習の履修の有無による差は見られなかった。ただし、対象者が履修している臨地実習を基礎看護実習のみと領域別実習までの2群に分けたところ、領域別実習まで履修群の方が「道徳的強さ」について有意に高かった( $p < .05$ )。倫理的問題の経験の有無による差については、その中の患者の自律性の尊重に関する問題を経験している群の方が経験していない群よりも「道徳的責任感」のスコアが有意に高かった( $p < .05$ )。

本研究により、臨地実習について領域別実習まで履修した群の方が「道徳的強さ」について有意に高く、領域別実習が学生の道徳的感受性の育成に影響する様子が示された。一方で、「道徳的強さ」について1年生より3年生の平均値が有意に低くなっていたことについては、3年生の方が看護倫理に関する知識量が増えていることと相反する結果となっていた。これは、倫理的問題に関する知識、理解は学年(学習)とともに増加するが、道徳的感受性についてはそのような知識だけでは発達が難しいことを示しているのかも知れない。

また、倫理的問題の認識の程度は3年生がもっとも高くなっていた。これは、1年生から継続的に講義を受けて倫理に関する知識が蓄積されていることに加え、3年生になって看護の専門的

知識も深まったためと考えられる。一方で、3年生よりも4年生の方が低くなったことは、領域別実習の中で「患者の安全と自律性」、あるいは「拘束という加害に基づく安全の確保」という看護現場の現実を垣間見ることにより、このような倫理的な問題を問題として捉えにくくなっていることが考えられる。

以上より、道徳的感受性の育成は、単に知識の獲得だけでは図れない可能性、ならびに、領域別実習のような臨床看護の経験が看護学生の道徳的感受性に大きな影響を与えている可能性が本研究によって明らかになったと考える。

#### 4-2. スタッフ看護師が経験する道徳的苦難への組織的支援について

全国の660施設の病院の看護師長を対象とする質問紙調査を行った(2018年度)。137病院の協力が得られ、1,330部の調査票を配布し、758部の回答を得た(回収率56.9%)。結果の詳細は、研究成果論文2に示す。

本研究により、組織的支援における看護師長自身の倫理的姿勢と態度の重要性が高く認識されていることが示唆された。一方で、実施頻度については全体的にスコアが低く、現状では十分な組織的支援が行われていない様子が示された。

看護学生が卒業し、臨床看護師として活躍する中で、道徳的感受性がより高く育まれた看護学生ほど臨床現場で道徳的苦悩を経験することが懸念される。その軽減のために組織的支援が重要であることは言うまでもないが、まだその支援体制が十分ではないことが本研究で明らかとなった。看護基礎教育課程において、道徳的感受性のみならず、将来の道徳的苦悩に対応できる能力、モラルレジリエンスを併せて教育していくことの重要性が示唆された。

#### 4-3. 道徳的感受性を育む教育法の検討 - 倫理的問題事例を用いたグループワークの有用性

##### 1) 方法

看護学生への看護倫理に関する教育の効果を把握するために2つの調査を実施した。(1)授業前後のMSQ-ST2を用いた定量的な質問紙調査、(2)「身体拘束」を題材とした倫理的問題事例(DVD視聴)に基づくグループワークを通じて感じたことを示したレポートに基づくインタビュー調査(ともに2019年度)。すべての調査は、分担研究者が所属する機関の倫理審査委員会による承認を得て行った(中部大学:承認番号20190046)。

##### 2) 結果および考察

###### (1) 授業前後のMSQ-ST2スコアの変化

87名の学生に対するMSQ-ST2を用いた調査では、道徳的感受性を構成する「道徳的強さ」、「道徳的な気づき」、「道徳的責任感」のうちの「道徳的強さ」と「道徳的な気づき」の2つの因子の得点が授業後に有意に低くなっていた( $p < .05$ ,  $p < .01$ )。また、因子得点としては有意差が認められなかった「道徳的責任感」についても、因子を構成する2項目のうち1項目で得点が有意に低くなっていた( $p < .05$ )。これらの結果は、学生の無垢な道徳的疑問に対する感性(それまで自然発生的に学生の内面に涵養されていた道徳的な問題に気づく感性)について、学年が進むとともに低下していくという先行研究の結果と一致していた。すなわち、もともと感じていた道徳的疑問が、たとえば、患者の安全性のための身体拘束が行われている現実を教科書的に、あるいは臨床実習を通じて垣間見る中で「安全のためならやむを得ない」とか「看護師の多忙な現状を考えれば仕方ない」などの看護・医療の現実に触れることによって一時的に見えにくくなっているのかも知れない。

このことは、看護倫理の教育において倫理原則などを教える際に、倫理原則や価値のとらえ方にはこのような逆転が生じることに十分に留意する必要があること、ならびに、倫理原則や価値について多面的にとらえることの大切さを教えることの重要性、ひいては「ケアの倫理」の視点(対象にとって最も大切なことに目を向けること)も併せて教えることの重要性などを示唆していると考えられる。

###### (2) 倫理的問題事例のとらえ方についてのインタビューの結果

質問紙への回答後のインタビュー調査に協力してくれた6名の学生(全員女性)を対象として、看護倫理の初回授業時と第6回目に提出されたレポートに基づくインタビュー調査を実施した。

「身体拘束」を題材とした倫理的問題事例(DVD視聴)に基づくグループワークを通じて捉えた倫理的問題として、初回および第6回目授業時のレポートに共通して示されていたのは、「患者の想いをとらえる看護の大切さ」、「身体拘束への十分な説明の不足」などからなる【看護者の果たすべき責務への気づき】、「患者やその家族との約束不履行」、「信頼関係を損なう約束の不履行」などからなる【約束の不履行に関する疑問】、「身体拘束を回避するための方法の検討」、「容認されない身体拘束」などからなる【身体拘束の妥当性への疑問】、そして「安全を優先する看護者の判断」などからなる【拘束の背景についての理解】であった。一方、初回の授業時のみで捉えられていた倫理的問題は「患者の立場に立った問題の理解」、「患者の心情についての理解」などで構成される【患者の感情への理解】であり、第6回の授業時だけで捉えられていた倫理的問題は「看護学生の能力の限界」、「看護学生の立場の限界」などからなる【看護学生の能力の限界】、および「やむを得ない身体拘束」、「事故を防ぐ看護者の立場の理解」などからなる【身体拘束をする看護者の状況への理解】であった。

対象学生は、初回の授業時においても第6回目の授業においても倫理的問題事例の中に埋め込まれた患者の思いを一貫してとらえることができていた。具体的には、患者への十分な説明の大切さなどをとらえ、また、身体拘束は容認されるものではなくその是非について疑問に思い、それを回避する方法を検討すべき倫理的問題であることを認識していた。一方で、初回授業時には、

自分を患者や家族の立場に置いて患者の思いをとらえているのに対して、第6回の授業においては、グループワークの前に講義で身体拘束予防ガイドラインについての説明を行ったことによる影響も考えられるが、転倒や点滴の自己抜針等による事故の防止も看護者としての重要な役割だととらえるようになり、安全のためには身体拘束を行わざるを得ない看護の状況や看護者の葛藤についても強く認識するようになっていた様子が窺われた。

以上、看護学生の道徳的感受性については、4-1の研究結果と同様に、看護倫理に関する知識の増加に相反する道徳的感受性の一時的な低下が生じ、それは看護学生が本来持っていた道徳的感受性に対して、「患者の安全」とか「忙しい(限界のある)看護の現状」などの知識が一時的に前面に出てしまうためであると考えた。このことは、今回のインタビュー調査によっても支持され、道徳的感受性の育成のためにはそのような看護倫理の原則等の学習に伴う一時的な低下があること、そしてその一時的な低下から回復できるようにするための道徳観の涵養が求められることが示唆された。

#### 4-4. グループワークを取り入れた模擬授業の効果について

A大学看護学生3年生全員(80名)を対象として、2019年5月初旬から2019年8月中旬に無記名質問紙調査と介入調査を実施した。質問項目は、倫理的問題についての質問項目(研究成果論文1)に示された倫理的問題だと認識した度合いの大きい10項目、MSQ-ST2の11項目の道徳的感受性についての質問項目などによって構成した。調査の手順は、3年生の内の研究参加同意者40名に対する看護倫理に関する模擬授業の前後に、上記の質問項目についてWebアンケートを実施し、さらにグループワーク法として、学生がイメージしやすい事例を用いてA,Bの2グループに分けて介入研究を行った。Aグループには臨地実習を終えた4年生の学生(話題提供者)が倫理的問題を語り、自由に質問ができるようにし、Bグループには同じ事例を紙面によって提示するに留めた。グループワークの後に、各グループに改めて調査票への回答を依頼した。本研究は所属機関の生命倫理審査委員会保健学・疫学研究調査委員会において承認を受けたのちに実施した(承認番号:18-153)。また、模擬授業は、通常の授業外の時間に研究目的で実施し、参加不参加による参加者の不利益はない。

残念ながら、参加者数が少なくグループワーク法などの効果を統計学的に評価できなかったが、教科書に示されるような一般的な倫理問題の事例ではなく、自らが経験した道徳・倫理の課題を含む事例の方がグループの中でより深いディスカッションが展開され、学生の看護倫理・道徳への関心が高まる可能性が示唆された。また、学生への模擬授業に関するアンケートから、「看護倫理」の中で提示されるさまざまな抽象的な概念についても、具体的な事例を用い、それを同じ状況にある人たち(学生同士)とのグループワークで話し合うことで学習効果を高められることが示唆された。

#### 4-5. 道徳的感受性尺度看護学生版第2版(MSQ-ST2)の再現性について

1年生を対象とした生命倫理に関する授業(いのちと倫理)の授業評価のためにMSQ-ST2を用いたアンケートが授業開始前、1週間後(再テスト)、最終授業日の3回行われていた。所属機関の研究倫理審査委員会によりこれらアンケートを既存資料として研究に用いることの承認を得て(東都大学R0302)、尺度としての再現性を確認するための解析を行った。詳細は研究成果論文3に示す。

本研究により、MSQ-ST2尺度としての再現性はある程度以上は確保されていることが確認された。また、最終授業日(入学3ヶ月後)の調査結果については、ほぼ期待通りの3つの構成因子を再現できており、対象学生が多少なりとも看護について学んだ後に使用すれば、十分な信頼性と妥当性を持って、看護学生の道徳的感受性を定量的に評価できることが確認された。

以上、看護倫理、その他の授業や実習の前後でMSQ-ST2を用いて道徳的感受性を測定することで、どのような授業や実習経験が看護学生の道徳的感受性に影響を与えるか(プラスの影響とマイナスの影響がある)を把握し、教育へのフィードバックができることが明らかとなった。MSQ-ST2の看護教育現場へのさらなる普及を期待される。

#### 4-6. 看護倫理の授業への動画教材の導入の効果について

看護系大学3年生を対象とした科目「看護倫理学」における尊厳に関する授業の中で、講義および身体抑制をテーマとした動画視聴を行った。授業前後に、滝沢らが開発したMSQ-ST2を用いて道徳的感受性を調べた。なお、授業はコロナ禍による登校制限のため、オンラインで行った。

その結果、オンライン授業であることも影響したと考えられるが、MSQ-ST2に前後ともに回答のあったのはわずか10名であった。結果としては、参加者数が少ないことによる検出力不足もあり、動画視聴の道徳的感受性への影響については検出することができなかった。

講義の中に看護倫理に関する事例の動画教材を取り入れ、さらに、その事例についてグループワークにより意見交換することで道徳的感受性が向上することが先行研究で示されているが、コロナ禍で授業そのものがオンラインで行われた場合には、その効果が十分には得られない可能性が示された。これは、道徳的感受性の育成には学生同士の対面による意見交換が重要であることを示唆するものかも知れない。このことは、結果4-4においても、具体的な事例を用い、同じ状況にある人たち(学生同士)とのグループワークで話し合うことで看護倫理、道徳的感受性の育成に関する学習効果が示唆されており、整合性のある結果であった。

#### 4-7. 中学生の「ケア」のイメージ

本研究のテーマである道徳観の基盤が形成されていく中学生世代を対象に、ケアについてのイメージを調査した。

対象は、A 市内における、公立、私立、国立の 3 種類の各校の中学に研究協力を依頼し、研究の目的とともに倫理的配慮について説明し、生徒の同意と共に保護者の同意を得て、学校ごとにあらかじめ用意した 13 の質問項目についてグループインタビューを実施した。インタビューは学校が指定した教室で途中 5 分の休憩をはさみ約 60 分間行った。参加者の許可を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を起し質的帰納的分析(テーマ分析法)を 3 名の研究者で行った。本研究は所属施設の倫理委員会の許可を得て実施した(承認番号 2019-0114)。

中学 1 年生 7 名、2 年生 8 名、3 年生 6 名、性別では男子 10 名、女子 11 名の合計 21 名で 3 つのフォーカスグループインタビューを構成し、調査を行った。逐語録に起こしたインタビュー結果を分析した結果、ケアに関する 5 つのテーマが抽出された。「対象へのケア」「ケアを通して得られるもの」「ケアの基となるもの」の 3 つのサブテーマからなる【ケアの本質】、「身近なケア」「学校や病院などの特定の場や施設で提供されるケア」「地域におけるケア」「国際協力や環境問題への取り組み」の 4 つのサブテーマからなる【ケアが行われる場や状況から捉えるケア】、「職業としての資格や専門性について」「ケア提供者としての資質について」の 2 つのサブテーマからなる【ケアは誰によって行われるものか】、「ケア提供者がかかえる問題」「ケアに付随する問題」の 2 つのサブテーマからなる【ケアのネガティブな面】、そして、【ケア提供者は生徒の将来の目標になっているか】の 5 つのテーマである。

生徒たちは、「ケア」を非常に広く捉えていた。また、ケアには身体面のことだけでなく精神面のことがあることも踏まえた回答があった。ケアが双方向性であることやケアが関係性によって深まるものであることなども語られていた。ケアの提供者として医療専門職である看護師、医師、care worker などが上げられていたが、それ以外に非医療系の専門職である教師、弁護士、カウンセラーなどを上げるもの、さらには、スポーツトレーナー、ピアノの教師などくに資格を必要としない職種を上げるものもいた。生徒たちがいわゆる医療・介護のケアを経験することは少ないため、自分たちが今までに経験したことから、非常に広範囲にケアとその提供をとらえていることが示され、将来の看護を目指すものも含まれるこの年代について、看護という専門職がケアの中核的な担い手であるというイメージは、まだほとんど形成されていないことが示唆された。しかし、道徳的感受性と言う観点からは、これら Z 世代がケアの本質につながるイメージを抱いており、成長と学習の進展とともに道徳観のさらなる発達が期待された。

#### 4-8. 情報発信と意見交換のための web プラットフォームの構築

科学研究の成果および今後の道徳的感受性育成のための教育に役立つと考えられる従来の研究成果の公開、ならびに教育法の改善に取り組んだ看護教育者との情報交換のための web プラットフォームを構築した。

看護倫理の授業を担当する教員が様々な工夫をしながら行っていることは明らかである。その中で、予想以上の効果を上げた授業、あるいは学生の道徳観に強く影響を与えた事例なども考案、開発されているかも知れない。しかし、看護倫理教育の実践について論文として発表されたものは多くない。それは、実際の授業における工夫などは、あくまでも教育実践であり、その中に事前の研究倫理審査を必要とする研究的な枠組みを入れることが難しい現状があるのだと推察される。そのため、研究実践を通じて得られた貴重な成果が研究成果として発表されることが少ないのであろう。

本研究では、そのような埋もれた教育上の工夫や経験を看護倫理教育者が研究倫理審査というハードル無しで、かつ、著作権も明示しながら共有できる場の構築を行った。そのための web 上のプラットフォームを構築した。

<https://ethicsworld.net/>

このプラットフォームでは、研究者らが開発してきた看護倫理、道徳的感受性にかかわるさまざまな尺度を公開するとともに、看護倫理教育に関心を持つ看護倫理教育者が自由に参加して、自身の看護倫理上の経験や工夫を発信できる場とする。このプラットフォームに多くの看護倫理教育者が参加すれば、サロンのような形で意見交換もできるようになると期待する。

ただし、多くの看護倫理教育者に参加してもらうためには、この web 上のプラットフォームのセキュリティーの確保(悪意のある参加者が排除できる仕組み)と公開した教育上の工夫について著作権を宣言できる仕組みなどが必要になると考える。今回、それらの条件を基本的に満たすことのできる web プラットフォームを本科研による成果物の一つとして公開し、運用を始めることとした。

#### <研究成果論文>

- 1 高木香織, 太田勝正, 真弓尚也, 荒川尚子: 看護学生の倫理的問題に対する認識と関連要因の検討, 日本看護倫理学会誌, 13:42-50, 2021
- 2 山本麻記子, 太田勝正: 看護管理者が認識する道徳的苦悩の軽減を目指した組織的支援のあり方, 日本看護倫理学会誌, 12:44-53, 2020
- 3 太田勝正, 諏訪免典子, 松田正己: 道徳的感受性尺度看護学生版第 2 版 (MSQ-ST2) の新入生への利用可能性の検討, 東都大学紀要, 12:33-40, 2022 (in press)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 山本麻記子, 太田勝正	4. 巻 12
2. 論文標題 看護管理者が認識する道徳的苦悩の軽減を目指した組織的支援のあり方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 44-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.7001200100	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Nanako Hasegawa, Katsumasa Ota	4. 巻 17
2. 論文標題 Future prospects for dignity in care in the era of nursing-care robots	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japan Journal of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 e12358
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jjns.12358	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 高木 香織, 太田 勝正, 真弓 尚也, 荒川 尚子	4. 巻 13
2. 論文標題 看護学生の倫理的問題に対する認識と関連要因の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 42-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32275/jjne.20001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 曽根千賀子, 太田勝正	4. 巻 26
2. 論文標題 看護師が捉える認知症ケアの大切さとそれに影響する要因	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 八尋道子	4. 巻 32
2. 論文標題 看護倫理を教える・学ぶ：倫理的能力の促進と尊厳あるケアの提供	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 老年精神医学雑誌	6. 最初と最後の頁 208-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森 智子、太田勝正	4. 巻 11
2. 論文標題 患者尊厳測定尺度日本版 (J-PDS) 短縮版の開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 75-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32275/jjne.11.1_75	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hasegawa Nanako、Ota Katsumasa	4. 巻 26
2. 論文標題 Concept synthesis of dignity in care for elderly facility residents	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Nursing Ethics	6. 最初と最後の頁 2016~2034
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0969733018824763	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Katsumasa Ota, Jukai Maeda, Ann Gallagher, Michiko Yahiro, Yukari Niimi, Moon F. Chan, Masami Matsuda	4. 巻 13
2. 論文標題 Development of the Inpatient Dignity Scale Through Studies in Japan, Singapore, and the United Kingdom	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian Nursing Research	6. 最初と最後の頁 76-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.anr.2019.01.008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Gallagher Ann, Lane Aoife, Egan Caroline, Ota Katsumasa, Aoishi Keiko, Nakayama Natsuki, Kasimovskaya Nataliya, Fomina Elena, Geraskina Natalia, Shalakhova Anna, Cox Anna	4. 巻 early view
2. 論文標題 Views of Generation Z regarding care and care careers: a four-country study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Care and Caring	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1332/239788221X16308608299691	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 太田勝正, 諏訪免典子, 松田正己	4. 巻 in press
2. 論文標題 道徳的感受性尺度看護学生版第2版 (MSQ-ST2) の新入生への利用可能性の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東都大学紀要	6. 最初と最後の頁 in press
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Otake Eriko, Ota Katsumasa, Ikegami Chikako, Niimi Yukari, Yamada Satoko, Maeda Jukai, Matsuda Masami	4. 巻 8
2. 論文標題 Proxy evaluation of dignity expectations and satisfaction of older patients with dementia by family members and nurses	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nursing Open	6. 最初と最後の頁 3120 ~ 3134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/nop2.1024	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyoshi Takizawa, Katsumasa Ota, Jukai Maeda	4. 巻 83
2. 論文標題 Development of a questionnaire to measure the moral sensitivity of nursing students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nagoya Journal of Medical Science	6. 最初と最後の頁 477-493
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/nagjms.83.3.477	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 夏目 美貴子, 滝沢 美世志, 太田 勝正
2. 発表標題 看護倫理の授業が学生の道徳的感受性に与える影響（その1） 身体拘束に対する学生のとらえ方の変化
3. 学会等名 日本看護倫理学会第13回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 滝沢 美世志, 夏目 美貴子, 太田 勝正
2. 発表標題 看護倫理の授業が学生の道徳的感受性に与える影響（その2） 尺度でとらえた感受性の変化
3. 学会等名 日本看護倫理学会第13回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 夏目 美貴子, 滝沢 美世志, 太田 勝正
2. 発表標題 看護倫理の授業改善のための課題 1校の看護大学生のインタビューから
3. 学会等名 日本看護研究学会第46回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田勝正
2. 発表標題 交流集会：看護学生の道徳的感受性の変化を踏まえた看護倫理教育のあり方について
3. 学会等名 日本看護倫理学会第13回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Katsumasa Ota, Makiko Yamamoto, Nanako Hasegawa, Yukari Niimi
2. 発表標題 Organizational support to reduce moral distress and cultivate moral resilience
3. 学会等名 The 20th International Nursing Ethics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nanako Hasegawa, Katsumasa Ota
2. 発表標題 Cross-cultural and research participant's perceptions of the characteristics of dignity in care for the elderly in residential facilities
3. 学会等名 The 20th International Nursing Ethics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本麻紀子、太田勝正
2. 発表標題 道徳的苦悩の軽減と道徳的回復力の育成への組織的支援に関する看護師長の認識
3. 学会等名 日本看護倫理学会第12回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miyoshi Okuma, Katsumasa Ota, Jukai Maeda
2. 発表標題 Development of the Japanese version of the Moral Sensitivity Questionnaire for nursing students
3. 学会等名 9th Nursing Ethics Conference and 4rd International Ethics in Care Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長谷川奈々子, 太田勝正
2. 発表標題 尊厳についてのインタビュー調査から得られた高齢者施設入居者の介護ロボットに関するイメージ
3. 学会等名 第36回日本ロボット学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 籠 玲子、太田勝正、新實夕香理
2. 発表標題 徳の倫理の視点からの看護師と患者との関わりの検討 よい関わりの要素の抽出
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 諏訪免典子, 太田勝正, 松田正己
2. 発表標題 看護学生の道徳的感受性尺度の測定について
3. 学会等名 東都大学沼津キャンパス第1回学術研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山菜津紀、青石恵子、太田勝正
2. 発表標題 中学生の「ケア」に対するイメージ（第1報） - ケアの本質に対する認識
3. 学会等名 日本看護倫理学会学第14回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青石恵子、中山菜津紀、太田勝正
2. 発表標題 中学生の「ケア」に対するイメージ（第2報） - ケアを提供する職業と自身のキャリアイメージ -
3. 学会等名 日本看護倫理学会学第14回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊幸代、太田勝正
2. 発表標題 臨時実習に出る前の学生への有効な授業方法の検討 講義とグループワークを比較して
3. 学会等名 日本看護倫理学会学第14回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田勝正、勝原裕美子、小野美喜、小西恵美子、八代利香
2. 発表標題 交流集会：コロナ禍の看護職のトーク広場
3. 学会等名 日本看護倫理学会学第14回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 夏目美貴子、滝沢美世志、太田勝正
2. 発表標題 看護学生の臨地実習における倫理的問題の経験と道徳的感受性との関連－臨地実習修了時点の学生について
3. 学会等名 日本看護倫理学会学第15回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 太田勝正
2. 発表標題 大会長講演：道徳的感受性とモラルレジリエンス
3. 学会等名 日本看護倫理学会学第15回年次大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小西恵美子、八尋道子、サマンサ・メイチェ・パン、サイ・ショウエイ、中村充浩、太田勝正ら	4. 発行年 2021年
2. 出版社 南江堂	5. 総ページ数 260
3. 書名 看護倫理 よい看護・よい看護師への道しるべ 改訂第3版	

1. 著者名 太田勝正、前田樹海	4. 発行年 2020年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 175
3. 書名 エッセンシャル看護情報学第3版	

1. 著者名 太田 勝正、前田 樹海	4. 発行年 2022年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 192
3. 書名 エッセンシャル看護情報学 2022年版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	夏目 美貴子 (Natsume Mikiko)  (60434578)	中部大学・生命健康科学部・講師  (33910)	
研究分担者	滝沢 美世志 (Takizawa Miyoshi)  (20736269)	名古屋学芸大学・看護学部・講師  (33939)	
研究分担者	八尋 道子 (Yahiro Michiko)  (10326100)	佐久大学・看護学部・教授  (33606)	
研究分担者	山田 聡子 (Yamada Satoko)  (80285238)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授  (33941)	
研究分担者	前田 樹海 (Maeda Jukai)  (80291574)	東京有明医療大学・看護学部・教授  (32821)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	University of Surrey			